

## しま ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒率の季節推移

イネ縞葉枯病と媒介虫ヒメトビウンカについて、水田での発生推移と病原ウイルス保毒虫率の季節推移を調査した。その結果、栽培期間中、保毒虫率と発病株率はおおむね連動して高まることが、収穫後のひこばえ（再生株）感染株が越冬虫の新たなウイルス獲得源として重要なことが明らかになった。

### 内 容

近年、本県ではイネ縞葉枯病（写真）の発生が増えつつある。その発生要因を解析するために、水田での本病の発生と媒介虫ヒメトビウンカの病原ウイルス保毒率の季節推移を2013年6月～10月に調査した。

本病が問題となっている県西部において、たつの市と上郡町の各1地点で保毒虫率と発病株率を調べた結果、イネ栽培期間中、保毒虫率と発病株率はおおむね連動して高まる傾向がみられた（図1）。ヒメトビウンカとイネの間でウイルスの保毒と発病を繰り返しながら保毒虫率と発病株率とともに高まっていくと推察される。また、初期の保毒虫率が高い地点では、その後の保毒虫率と発病株率の上昇が顕著であった（図1、上郡町）。

当センター内の水田での調査から、第二世代虫（田植え後水田に侵入する虫の次世代）の発生量が発病増加の要因になると示唆されている（データ略）。また、収穫後のひこばえの発病株から採集した個体では、健全株から採集した個体より保毒率が高く、感染したひこばえが越冬虫の新たなウイルス獲得源となることが示唆された（図2）。



写真 イネ縞葉枯病による穂の出くみと葉の黄化

イネ栽培期間を通して上昇した保毒虫率は、新たなウイルス獲得機会のない越冬世代から第一世代で低下するものの、ある程度次年度に受け継がれると考えられる。また、前述のとおり、初期の保毒虫率の高低がその後の保毒虫率と発病株率の上昇度合につながる。そのため、本病の流行を防ぐためには本田初期の防除や収穫後のひこばえのすき込み等、総合的な対策を確実に行うことが重要である。

### 今後の方針

保毒虫率の季節推移を基に、イネ縞葉枯病の早期発生予察手法を開発する。また、効率的な防除体系を検討する。

城戸 剛（農産園芸課、前環境・病害虫部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-1222）

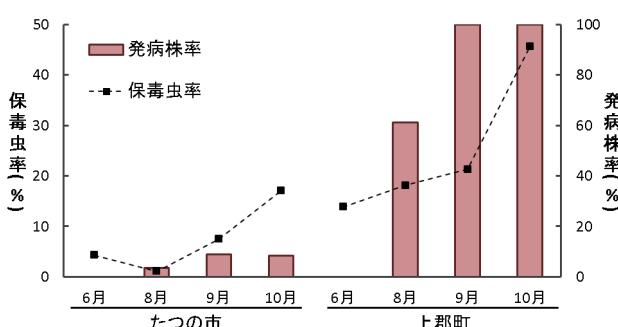


図1 保毒虫率と発病株率の季節推移(2013年)

注) 6月は小麦圃場、8月から10月は水田

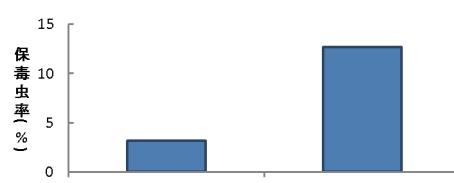


図2 ひこばえにおける保毒虫率(2013年、加西市)